2E2-01

テクスト変容過程のモデル化

A modeling of the text transformation

森田 均[*1]
Hitoshi MORITA

[*1] 県立長崎シーボルト大学国際情報学部情報メディア学科
Department of Info-Media Studies, Siebold University of Nagasaki

This document shows the process of the text transformation depends on evolution of the expression form and social factors. The result of this research (floating hypertext) can be widely applied to the field of the humanities.

1. はじめに

本研究に先立って筆者は，複数の実験小説をハイパーテキスト化し，評価を行った[森田･藤田 01] [Morita&Fujita02a] [Morita&Fujita02b]. ハイパーテキスト化によって原テクストの論理構造を明確にし，修辞を可視化できることを明らかにしている. また，評価実験によって特定の解釈に基づくハイパーテキスト化も可能となることが分かった. ハイパーテキストへの変換にあたっては，原テクストの論理構造と修辞を的確に把握することによって，紙媒体では不可能な表現手法を得ることができる. さらに，まず原テクストの論理構造と修辞の構造を明らかにすることによって，テクスト分割や構造化を行ない，ハイパーテキスト変換の手法を示した[Morita&Fujita03].

本研究は，こうした手法を発展させ，テクストの時間及び空間による条件の相違などに対応すべく，手始めに長崎県由来関連のコンテンツを検討対象とした. 情報メディア研究の分野において，活版印刷，新聞，無線電信など長崎を開闢の地とする研究対象は数多いが，これまでは歴史学等の分野から様々な研究が行われて来た. 活版印刷に関しては，幕末期の長崎奉行所通詞本木昌造を中心とした研究が行われていたが，本研究では天正時代にまで遡り遣欧使節の従者コンスタンチノ･ドラードを対象とする. ドラードは 2004 年に出生地の諫早で顕彰が行われるなど再評価が進んでいる. また，平戸藩主を退いた松浦静山による『甲子夜話』のデジタル化を検討した. このテクストは現存する日本最長の随筆であり，平戸のみならず文政･天保時代の社会風俗に触れている. 本文の校訂は慎重に行われているが膨大なテクストに対して即時活用可能な索引が作成されていない. 一方でこのテクストに掲載されている事項から様々な時代劇や時代小説が誕生するなど，物語の種子とも言うべき役割を果たしている. このテクストについて，構造を明らかにするモデルを作成し，電子化の予備作業を行った. 地域に残る近世近代のテクストをデジタル化する先行研究は存在するが，当該テクストから別の作品が派生する「物語の種子」として位置づけ，物語論･メディア論と関連づけて行うのが本研究の特徴である.

2. 方法論

2.1 文献研究

筆者は既に，人文科学研究の手法や成果を積極的に活用することによって，人工知能研究の成果から恣意性を排し明確な局所化へと導くことの意義を示した[森田･藤田 05a]. 天正時代の活版印刷に関しては，リプリント版や研究書を調査した. また，筑波大学附属図書館は Web 上に「活版印刷の伝来」を開設し，ドラードによる印刷物を一部公開している. この内容について本研究に役立てるのはもちろんであるが，研究終了後の成果公開の方法としても参考にすべき事例と考えている. 電子化されていながら書籍は入手が難しくなった『甲子夜話』については，私家版の索引集を含めてテクストの調達方法から検討した.

2.2 資料のデジタル化

文献研究によって得た知見を踏まえて，以下のような手順で資料のデジタル化を考えた.

1. **テクストの電子化**
2. **文章構造のモデル化試作**
3. **ハイパーテキスト化**

なお，『甲子夜話』全編のデジタル化を目的にはせず，最小のモデルを構築することによってイパーテキスト化するための指針を得ることを目指した.

2.3 理論の整理と精緻化

上記の成果をまとめ，マクロおよびミクロ的視点を交差させる作業を行った. 検討項目は，以下の通り.

1. **双方の視点をメディア史の中に位置づける**
2. **マクロ的視点として，他の事例（新聞や無線電信など）を応用する可能性を検討する**
3. **ミクロ的視点として，『甲子夜話』全編のデジタル化を実現させるために必要な要件を明確化する**

3. 『甲子夜話』の論理構造

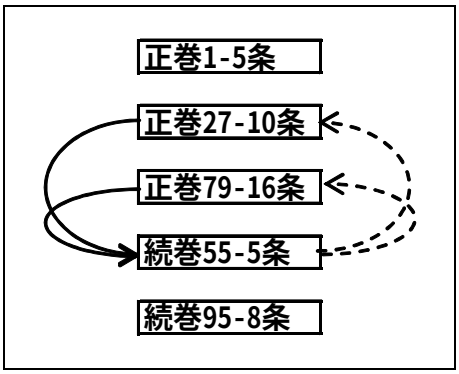
周知のように『甲子夜話』は，東洋文庫版で 20 冊におよぶ膨大さである[松浦 77-78][松浦 79-81][松浦 82-83]. これを読破するためにも，また必要な事項のみを抽出する際にも，電子的な操作が可能な検索保存方法を検討することは，意義深い. 甲子夜話は，落語や時代劇の種，「物語の種」としての役割を果たして来た. 甲子夜話の論理構造は，時系列で項目ごとに相互参照の形を取っている.

3.1 キーワード「忍者」

[山田 64]は，まさに種を得た典型とも言える小説である. 『甲子夜話』の現行テクストへの疑義を明らかにしているが，異本の有無など確かめようの無い読者にとっては，この言説が資料的な事実に基づくものなのか小説として表現に必要な虚構なのかは判別が難しい. それでも，他の部分は『甲子夜話』の具体的な巻数を示しながら叙述が進めら

連絡先:森田均,県立長崎シーボルト大学国際情報学部情報メディア学科，851-2195 長崎県西彼杵郡長与町まなび野 1-1-1，095-813-5105(直通電話&Fax)，morita@sun.ac.jp

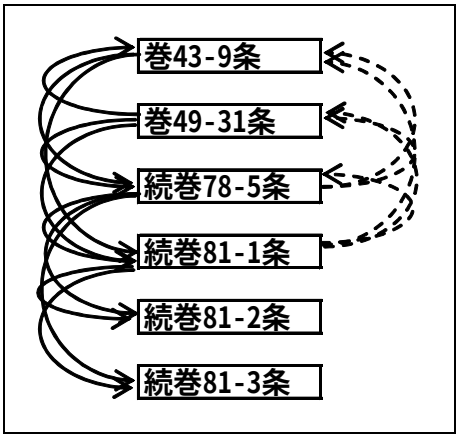
れており，表示された巻条には対応関係を確認することができる．これは，「忍者」をキーワードとして含んでいる可能性がある巻条を特定するためには役立つものである．[坂田 67]は，正・続・三篇の全てに渡る詳細な目次であり，巻・条の関連性を明確に記している．試みに「忍者」というキーワードを含む条を抽出してみた．それぞれの条について[山田 64]及び[坂田 67]を参照した．[山田 64]は前述した通り判断を保留とせざるを得ない巻条が一箇所あった．一方で[坂田 67]を参照したところ，関連性が明記されているのは５条中の３条であった．それぞれの参照状態を図示すると，図１のようになる．関連性を明記している条は，それぞれ相互にリンクされた状態にあることが明らかとなった．なお，「忍者」は真田幸村に対する記述と関連し，さらに豊臣秀頼九州存命説にも連なるものであるが，ここではこれらの派生を割愛した．



＜図1:「忍者」をキーワードとしたリンク構造＞

3.2 キーワード「鼠小僧」

大名屋敷を舞台にした窃盗であったため松浦静山も関心があったものか，『甲子夜話』には「鼠小僧」への言及が目立つ．これをキーワードとして[氏家 91]を手掛かりに巻・条を抽出した．この事例でも[坂田 67]を参照したところ，関連性は図２に示したように明記されている．「忍者」のケースと同様に相互リンクの状態にある．続篇巻八十一（二）と続篇巻八十一（三）は，続篇巻八十一（一）の詳細記述あるいはまさに続篇であることから，前４条で強固な関連性を描いているものと考えられる．



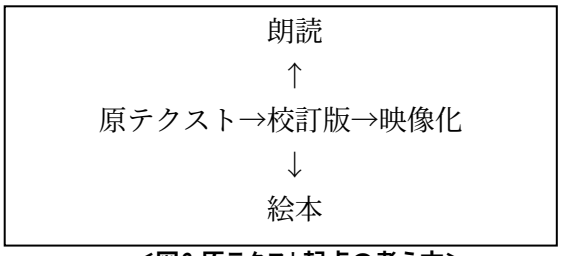
＜図2:「鼠小僧」をキーワードとしたリンク構造＞

3.3 電子化の可能性

『甲子夜話』のテクストを書籍として入手しようとすると，正篇を除き版元品切状態であるため，非常な困難を伴う．紙の書籍以外で正・続・三篇の全巻を一般に販売をしているのは，株式会社イーブック･イニシアティブ･ジャパンによる電子版である．（http://www.ebookjapan.jp/）本研究では，計画段階において『甲子夜話』のデジタル化を予定していた．しかしながら，研究を進めるうちに，上記した電子版の存在が判明した．しかも，この版は平凡社東洋文庫版の版面をそのまま電子化したものである．ここまで調査を進めた段階で，これ以上公開を目的とした電子化やデータベース化を具体的に推進することは知的財産権に関連する問題と直面する恐れがあると考えられた．従って本研究ではあくまでも研究上必要な範囲で文字認識による電子化を行うよう研究方針を修正した．しかしながら，ハイパーテキストのモデル化を行うという当初の目的は前説に記したように達成できている．なお，上記の電子版はコンピュータの他に読書を最優先に設計された専用電子端末で読むこともできる．だが，画面の印刷は不可能であり，電子化されているとは言え文書の構造化は目次･本文･奥付のみであり，細かな語句はおろか巻条のハイパーリンクも実現されてはいない．本研究で行った構造化検討は，次世代の電子版を計画する際には貢献可能であると考えられる．

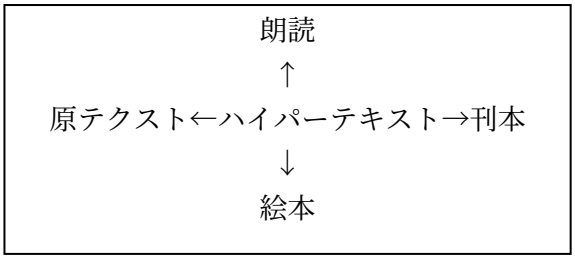
4. メディア表現のためのハイパーテキスト

筆者は既にフローティング・ハイパーテキストという名称で，テクスト解釈や表現形態研究のために，中間的な存在としてハイパーテキストを用いることを提案した[Morita&Fujita04] [森田･藤田 05].



＜図3:原テクスト起点の考え方＞

従来のメディア比較やメディア変換の手法は，原テクストを起点とした（図３）．これは，生原稿や初版本を重視する従来の文献学的研究と同根である．あくまでも印刷されたテクストが原点となる．そこで，図４に示すようにハイパーテキストを全ての比較の基準とする考え方を用いる．これは，テクストの原点をどこにするかという問題を提起する．



＜図4：フローティング･ハイパーテキスト＞

ただし，手稿などのオリジナルを求めるのではなく，「変換」の可能性を徹底して探ることでもある．また，あらゆる変換の原点をテクストとして，その表現形態をハイパーテキストとする．ハイパーテキストは，あらゆる表現形態の中間的な役割を担うべく「中心」に位置するわけである．実証的な手法を崩さずにこのモデルを精緻化するために，まず現段階ではテクストから流布されたものの痕跡を探った．従来の文学研究と一線を画するために，深層に立ち入ることを最大限避けあくまで表層からのアプローチを貫いたわけだが，今後はこの手法を維持しつつ，テクストから画像や音への変換ルールの獲得を目指す．

5. 天正時代の活版印刷

5.1 関連資料の現状 ―刊本―

本研究において調査した資料を年代順に列記すると以下のようになる．[三浦 82], [結城 82], [松田 91], [望月 94], [青山 99], [青山 01], [若桑 03], [青山 04], [有馬 05]. 一見して明らかなようにあえて一次資料は除外した．また，天正少年使節あるいは使節のうちの一名又はヴァリニャーノ等の聖職者ではなく，リスボン等で活版印刷技術を学び帰国後に実際にキリシタン版の印刷を担ったコンスタンチノ・ドラードという人物を中心にして物語型の記述方法を採用した資料を収集調査した．これは，本研究が歴史学や文学等資料的価値を第一とする研究領域に属するものではなく，コンテンツの流布あるいは変遷に着目するメディア論分野のものであることが最大の理由である．フィクションの要素が色濃くなる物語型記述による資料は，一次資料に無い事項を作者に想像力によって補っている．従って同じコンスタンチノ・ドラードという人物に関しても資料によっては出生や言語的能力など具体的事項が矛盾する場合もある．本来ならば研究の対象とできないような一次資料に基づかない，あるいは一次資料との関連性が明確ではない資料を用いるのは，次節で扱う資料への橋渡しをしているとも考えられるからである．

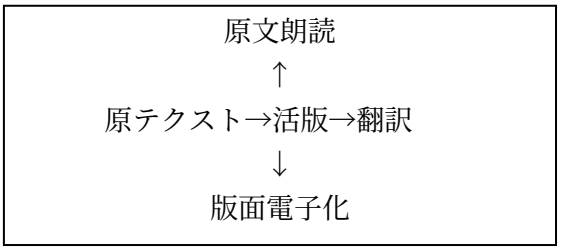
[三浦 82]は序章と終章を除く殆どの部分がドラードの視点で記された小説である．つまり虚構の枠の一層を正史や副使ではなく従者の視線から描く手法を取っている．フィクションとしては自由度が高くなる．[青山 01], [青山 04]はともにドラードを表題としたものである．後者は小中学生向きの平易な記述により，さらに諫早市立諫早図書館に建立されたドラードの銅像と関連するものである．また，[若桑 03]はテレビ番組の資料となっている．

5.2 刊本以外の資料

Ⅰ.電子化資料

コンスタンチノ・ドラードの名前が明確に記された印刷資料は，遣欧使節が恩師ヴァリニャーノに対して行った報告と感謝の念を込めた『原マルチノの演説』である．現存しているのは，イギリスの図書館に収蔵されているもののみだが，これを含めた遣欧使節関連の重要な資料を展示したのが，筑波大学附属図書館による特別展覧「天正少年使節と『原マルチノの演説』」であった．同展覧は，公開(http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/exhibition/tokubetuten/frontpage.html)されているが，『原マルチノの演説』は全文ではない．まず原本の画像，次に内容を起した文字データ，並びに逐語訳がある．さらにこの Web で特徴的なのは，原文ラテン語の朗読が音声データとして再生される点である．

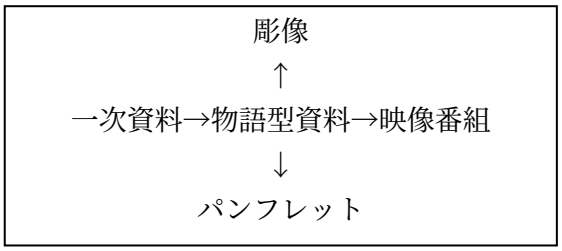
教会の関係者や研究者にとっては重要なラテン語もそれ以外の人々にとって音声化されていてもどれほどの意義があるのか疑問ではある．一方で視覚障害者に配慮した Web 構築を行った（アクセシビリティ JIS 準拠）とも考えられるが，それにしては日本語ではなくてラテン語のみ朗読されている理由を説明できるものではない．このように目的は明確ではないが，資料公開の一方策として音声化にまで対応しようとする姿勢は評価すべきものと考えられる．このコンテンツの状態は，図５のように示すことができる．



＜図5：原マルチノの演説＞

Ⅱ.ドラード像

2004 年，諫早市立諫早図書館にコンスタンチノ・ドラード像が寄贈された．写真さえも存在しない歴史上の人物を像としたもので資料的価値よりも顕彰を目的としていることは明確である．この場合は，図６に示すような状態である．



＜図6：ドラードの物語＞

前節に記したように[青山 04]がこの像を説明する役割を担っている．他に諫早図書館の像前では[昭和堂 04]が配布されており，このパンフレットには関連資料も明記されている．

5.3 コンテンツ表現の可能性

既に『甲子夜話』の階層構造と相互リンクの特性を指摘した．今後研究を進展させるためには，この構造的特性を反映させた電子化が是非とも必要なことは言うまでもない．なお、『甲子夜話』と同時代のもので，実在しない冊子をコミックに変換した事例としては[石ノ森 04]がある．この事例は電子化されているので図4と図6の双方の特徴を兼ね備えるものである．一方で[森永 62]は長崎奉行所の犯科帳を読み物として大衆化しているが，1975 年に日本テレビ系列でドラマ化されたのが[ユニオン 03]である．時代劇なので娯楽作品としての傾向は強いが，映像による表現として検討対象とした．この他に[柳田 83]など，長崎を舞台として全国的に流布された昔話等があるが，現時点では参照するに留めた．

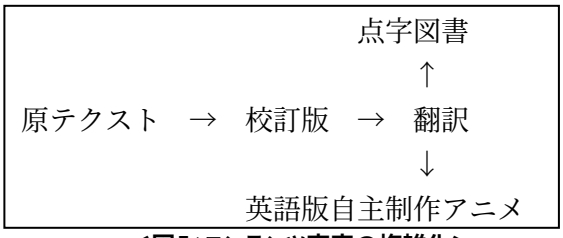
ドラード関連のコンテンツについては，物語型資料を起点とすると，その展開は作者側の自由な発想に任されるため法則性を見出すことは不可能と考えられる．本研究の成果を受けて提言できることは，もはや Web において月並みなコンテンツではあるが，ホータルサイトの構築である．ただし，単なるリンク集ではなく，コンテンツの特性を充分に把握する必要がある．「長崎

県印刷工業組合ホームページ」(http://www8.ocn.ne.jp/%7Epb-naga/) のコンテンツは非常に充実しているが，天正年間まで及ぶものではない．[青山 99]の視座を踏襲するような時系列的にも地理的にも幅広い範囲を想定した Web の構築が急務であろう．

6. まとめと展望

テクストから他の表現方法へと変換された事例として最大規模のものは『源氏物語』であろう．歴史的経緯からも，受容史からも絵巻や現代語訳に始まり舞台作品や映画，貝合わせやカルタ，物語のモチーフを意匠とした物品に至るまで様々である．また密教における経典・曼荼羅・声明は，宗教的な意義の他に同一内容を文字・画像・音声と異なる表現手段で描いたものとしても位置づけることができる．このようにテクストを巡る状況において，フローティング・ハイパーテキストは，工学的な研究が人文科学に寄与するための思考モデル[Morita&Fujita04]として，テクスト解釈や表現形態研究のために，いわば中間的な存在としてハイパーテキストを用いることを提案した理論的枠組みである．

フローティング・ハイパーテキストは一般的な研究の成果をまとめたものであるが，既に記してきたようにこの成果を長崎県由来関連のコンテンツにも応用することは充分に可能であると判明した．



＜図7：コンテンツ変容の複雑化＞

なお，図７は[宮沢 66]の翻訳から展開した事例である．変容の最も激しいものであるがこのようなモデル化は可能であった[森田 04] [森田 05b]．フローティング･ハイパーテキストのコンセプトは，テクスト変容過程のモデル化として，時代や成立条件の異なるテクストに対しても応用可能であることが明らかになった．

参考文献

[青山 99]青山敦夫: 活版印刷紀行―キリシタン印刷街道･明治の印刷地図, 印刷学会出版部, 1999.
[青山 01]青山敦夫: 活版印刷人ドラードの生涯―リスボン→長崎 天正遣欧使節の活版印刷, 印刷学会出版部, 2001.
[青山 04]青山敦夫: もう一人の少年使節ドラード, 昭和堂, 2004.
[有馬 05]有馬のセミナリヨ建設構想策定委員会: 有馬のセミナリヨ, 北有馬町, 2005.
[石ノ森 04]石ノ森章太郎: 平賀源内 解国新書, イーブック･イニシアティブ･ジャパン, 2004.
[松田 91]松田毅一: 天正遣欧使節, 朝文社, 1991.
[松浦 77-78]松浦静山: 甲子夜話 1～6, 平凡社東洋文庫, 1977-78.
[松浦 79-81]松浦静山: 甲子夜話続篇 1～8, 平凡社東洋文庫, 1979-81.
[松浦 82-83]松浦静山: 甲子夜話三篇 1～6, 平凡社東洋文庫, 1982-83.
[三浦 82]三浦哲郎: 少年讃歌, 文藝春秋, 1982.
[宮沢 66]宮沢賢治: 注文の多い料理店, 童話集銀河鉄道の夜, 岩波文庫, pp.96-108, 1951(1966).
[森永 62]森永種夫: 犯科帳, 岩波新書, 1962.
[森下 88]森下一雄: 甲子夜話私注･上下, 私家版, 1988.
[望月 94]望月洋子: 加津佐物語, 加津佐町, 1994.
[森田 04]森田均: 注文の多い料理店のグラフ･地図･樹状図, 国際情報学部紀要第 5 号, 県立長崎シーボルト大学, pp. 117-131, 2004.
[森田 05a]森田均: 地域･メディア研究をめぐる研究方法, マス･コミュニケーション研究 66 号, pp.138-139,日本マス･コミュニケーション学会, 2005.
[森田 05b]森田均: 注文の多い料理店のハイパーテキスト変換とその評価方法, 国際情報学部紀要第 6 号, 県立長崎シーボルト大学, pp. 175-190, 2005.
[森田･藤田 01]森田均･藤田米春: ハイパーテキスト文学論, 認知科学 8(4), 日本認知科学会, pp.327-334, 2001.
[Morita&Fujita02a]Morita, H. & Fujita, Y.: Rhetoric for the Japanese Literary Hypertext, System Narratology ― iwLCC2002 (Proceedings of the 3rd International Workshop on Literature in Cognition and Computer in conjunction with PRICAI-02 (The 7th Pacific Rim International Conference on Artificial Intelligence)), pp. 11-20, 2002.
[Morita&Fujita02b]Morita, H. & Fujita, Y.: Literary Hypertext – toward a new kind of media representation–, Proceedings of the IEEE SMC ’02, CD-ROM, 2002.
[Morita&Fujita03]Morita, H. & Fujita, Y.: Making of Literary Hypertext and Evaluation Method based on Media Characteristic, Proceedings of the 4th International Conference on Cognitive Science, CD-ROM, 2003.
[Morita&Fujita04]Morita, H. & Fujita, Y.: Secondary Variations and Hypertext, Proceedings of the 18th Congress of the International Association of Empirical Aesthetics, pp470-475, 2004.
[森田･藤田 05a]森田均･藤田米春: 文学におけるグラフ･地図･樹状図, 人工知能学会全国大会 (第 19 回) 論文集 CD-ROM, 3D3-02, 2005.
[森田･藤田 05b]森田均･藤田米春: フローティング･ハイパーテキストの基本コンセプト, 日本認知科学会第 22 回大会発表論文集, pp.302-303, 2005.
[坂田 67]坂田勝: 検索補註甲子夜話総目録, 有光書房, 1967.
[昭和堂 04]昭和堂: 私は諫早生まれのコンスタンチノ･ドラード, 昭和堂, 2004.
[高野 78]高野澄･編訳: 松浦静山甲子夜話, 徳間書店, 1978.
[氏家 91]氏家幹人: 殿様と鼠小僧―老侯･松浦静山の世界, 中公新書, 1991.
[ユニオン 03]ユニオン映画: 長崎犯科帳 vol.1-7, キングレコード, 2003.
[山田 64]山田風太郎:「甲子夜話」の忍者 (初出:『オール読物』1964 年 3 月号) 大衆文学研究会･編:歴史小説名作館〈8〉, 講談社, pp. 353-361, 1992.
[柳田 83]柳田国男: 長崎の魚石, 日本の昔話, 新潮文庫, pp. 136-138, 1983.
[結城 82]結城了悟: ローマを見た, 日本二十六聖人記念館, 1982.
[若桑 03]若桑みどり: クアトロ･ラガッツィ―天正少年使節と世界帝国, 集英社, 2003.